

# 火星

平成二十六年十月号



七曜抄

(八)

山尾玉藻

乱れみて乱れ無かりし吾亦紅

種茄子となる先々を考へず

みさらひをゆたかに座せる月の縁

飲食の声が野に立つ秋早

鯨をメむ家内の風の筋

隠元にひと雨ありし紫野

一羽とて椋鳥こぼれざる夜闇

湖に杉桶みづく秋をさめ

かまつかに頂のある寒露かな

蛇穴に入り板羽目の松かたち

# 太白星

嵐電の駅名を読み夕涼し  
半夏生畳廊下をすり足に  
水を出し蹀くらし夏の鴨  
眼薬の上手に入りし青嶺かな  
螢袋咲き町ごとの祭蔵  
土用芽の行きも帰りも川に添ひ  
婆の言ふ飛驒の雨ぐせ夏薊

杉浦典子

浜口高子

芭蕉生家の鬩を跳びし雀の子  
出水跡の総出に鷺の下り立ちし  
出水川跨ぐホームの灯りたる  
大瑠璃を見上ぐる声の濡れみたり  
ごつごつに彫られし仏晩夏光  
嶺々に日照りのつづく篠の笛  
ひとり湯のひとりの濁り夕かなかな

# 火星作品

## 山尾玉藻選

粗草をぬけくる風の葎障子  
宝塚山本耀子

形代を流す流れの祓はれし

流れまで浅沓の踏む茂りかな

鯉濃の骨をきれいに土用かな

青柿の枝のしなれる土用照

麦刈つて風のざらつく日なりけり  
蘭定かず子

顎強こむき魚の旨しよ祭来る

雨やみし夏座蒲団を辞しにけり

鮎釣の入り川音の高ぶれる

風鈴や池に波紋の二つ三つ

神鶏の尾の上りゆく夏木かな  
小林成子

祇園会の帯にはさみし乗車券

葛切やうしろの席のこほり鳴る

夏草や夕陽ヶ丘に風絶えし  
青田波五体すみずみまでねむし  
夕焼やインコしきりに羽散らし  
ゼリー食ぶ男の貌の大暑かな  
帰省子の鈴りんに仏間のにぎはへり  
子の家の煮炊きのにほふ夕端居  
雲の峰たれかれ見ては泣く赤子  
夏椿ほとりはたりと時つかひ  
照らしあふ闇となりけり螢籠  
勝手口あれば小橋が草螢  
ひとの来て空のひらけし上り築  
早川たもの百態吊られをり  
片蔭をつれて客船出航す  
また若くなりし尼僧や夏衣  
屋上にボーリングのピン日の盛  
白雲をひと搔きしたる捕虫網  
白南風やたはしで洗ふ陶狸

宝塚山田美恵子

神戸深澤 鱻

京田辺安積亮子

## 選のあとに 山尾 玉藻

流れまで浅沓の踏む茂りかな 山本 燿子

形代流しが行われようとする景。川社まで神官が茂つた夏草を踏んでゆくのだが、どうもその足取りが危なげなのである。作者はそれを神妙な面輪で見守っている。

麦刈つて風のざらつく日なりけり 蘭定かず子

その茶褐色の所為であるが、熟れ麦が刈り取られていく景色には何とはなく騒ついた感じを覚え、作者が吹く風に「わびしく」の思いを抱いたのもその包りの感覚であろう。

祇園会の帯にはさみし乗車券 小林 成子

祇園祭の日は駅も電車も非常に混みあう。このチケツトは行きものか、それとも前もって購入した帰りのものか、作者は逸る心を抑えつつ浴衣の帯にそれをきっちり挟み込んだ。

帰省子の鈴に仏間のにぎはへり 山田美恵子

子供一家が帰省してきたのだろう。親に習って子供達も楽しんで何度も鈴を鳴らし、普段は静かな仏間が一気に賑やかな場と化した。素直な詠みぶりに好感を覚える。

ひとの来て空のひらけし上り籜 深澤 鱧

石組や簀で巧妙に仕立てた築場は辺りの自然とは異なる空間。しかし其処へ来た人たちの声々の所為で、急に普通の雰囲気は漂い始めた。「空のひらけし」はそんな感応を語ったもの。言うなれば非日常の世界が日常の世界へと転じた景。

片蔭をつれて客船出航す 安積 亮子

客船が出航し始めたと同時に、その客船自体が作り出していた片蔭までもが動き始めたのである。「片蔭をつれて」には作者の大きな発見と驚きがある。

朝顔の押し花透ける古代色 坂口夫佐子

紺の朝顔の押し花なら縹いろ、ピンクの朝顔なら丹いろ、藍の朝顔なら紫苑いろなどと、「古代色」の魅力的な一語で雅な色彩の世界が豊かにひろがり始める。押し花の紗のかかったような色合いを「古代色」とは、まことに言い得て妙。

兄の忌の夏座布団の上に名刺 高尾 豊子

兄の忌に訪れた見知らぬ人が名刺を置いて帰った。生前兄と親交のあった人であろう。夏座布団の上の名刺を見ながら、今更に自分の知らなかった兄の生前を偲ぶ作者である。

古書店に風の道あり星祭 大山 文子

「星祭」と「古書店」には何の関わりもないようだが、偶然の必然がある。敢えて言うなら、風にのる古書店の古びた匂いが、星祭のゆかしい情趣を呼び覚ます、と言ったところ。

ネクタイの乱れなかりし納涼床 奥田 順子

料亭や旅館の床は高級すぎて一般人は易々手が出ない。「ネクタイ」とあるが比較的若いサラリーマンを想像する。彼が緊張の面持ちで背筋を伸ばし座している様子が窺える。(以下略)



同人一

# 恒星圈

小林成子

夕日いま粧の花にとどまれり  
振り返りたる丘の上の茅の輪かな  
初版本入れて涼しき手提げ籠  
方丈さんへ祖母にならひし団扇風  
象小屋の餌あをあと夏休

加古みちよ

坂口夫佐子

風鈴の音の戸惑ふ風の中  
蚊を打つてわが血の濃さと思ひけり  
千年の杉の声聴く朝ぐもり  
老鶯や石庭の石ひびかせて  
山滴る塔頭の木戸開けられて

結葉や伊勢へ向きぬる木の鳥居  
木の股に日のとどまれる夕端居  
炎帝へ鈴と大鼓のとよめけり  
夏衣のかぶり直せし烏帽子かな  
月待つや龍の髯叢花つけて

河崎尚子

白数康弘

水桶に花合歓映ゆる溪の畑  
七夕の空港に子を待ちてをり  
姫女苑の白暮れ残る引込線  
白髪の百物語炎がゆらぐ  
洞門にカヤツク消ゆる晩夏光

首輪なき犬のつきくる秋の暮  
自転車の空気を入るる秋の暮  
家にまだだあれもぬない秋の暮  
マンホールの蓋踏めば鳴る秋の暮  
秋の暮舳先もたげて舟戻る

# 獅子座

山尾玉藻推薦

西村節子

淡海の嵩の増しきしごみ鯰  
市松に掃かる石庭土用なる  
まほろばの葭簀掛なる煮麴屋  
毗を灯虫の落ちし昼かな

湯谷良

蛸の足きざむ男に遠花火  
二つ目の師匠ゆづりの薄羽織  
乳張りし頃の紅絹裏土用干  
太極拳終はり蟬声せり上がる

中尾安一

短夜に目覚め余命を刻む音  
風鈴の夢の中よりうつつへと  
検索におのが名前をいれてみし  
籐椅子の容になつて眠りけり

香水の香の残りゐる試着室  
蠅叩持つてしばらく立ちゐたり  
写真屋の入口に立つ夏帽子  
サーキットの音遙かよりハンモック

藤本千鶴子

青青と胡瓜封じの胡瓜籠  
甲高き女声する鮎の宿  
梅雨晴やふしぐろせんをう揺れ通し  
草刈の燻し銀なるネックレス

江濱百合子

筆圧のやはらかなりし夏見舞  
花合歓の映る鏡を閉ぢにけり  
旅立ちはここからと告ぐ蟬の殻  
薄衣の背縫ひに乱れなかりけり

藤田素子

捕虫網の父子や団地探検す  
大鴉の一喝ありし大暑かな  
鼻歌とすれ違ひたる早星  
母の水着買ひにカラカウア大通り